

高校時代の私の夢は、照明など舞台の仕事に就くことでした。十九才の時アルバイトでしたが、客席百二十席のクラシックホールの照明と舞台をまかされました。その後、学校のミュージカル公演などの経験を積み、舞台監督を務めることになりました。夢の実現です。舞台監督は、演出家の思いを舞台に反映させ、役者、照明、音響、衣装、制作、舞台美術といった各スタッフのとりまとめ役です。舞台監督は稽古から立ち会い、役者さんの靴や頭のサイズなど、細々したことまであらゆることの確認作業を行います。そして本番では、すべて舞台監督にゆだねられるのです。初めて舞台監督の仕事をまかされた時、幕を上げる直前、先輩から助言をいただきました。「君は、今から宝石箱のふたを開ける。そして、お客さまがまだまだ宝石を見ていたいと思う中で、幕を閉める。そしてカーテンコールへ」と。いざ本番。私は幕を上げるスイッチを押す指が、プレッシャーと緊張で震えている事に気がきました。声楽の役者、演奏者は、何年も練習を重ね、稽古では演出家や指揮者に厳しく指導されます。各スタッフも、下積みを経た専門家です。この舞台芸術が一つに動き出す瞬間が、緞帳という幕が上がる、まさにその時です。舞台に関わる出演者、スタッフ、それぞれが、宝石のごとく輝きを放ちます。皆が、自分を宝石だと思っているわけではありませんが、ただただ自分の思いを強く持ち磨き続けていることが、そのまま宝石のごとく光っているのです。お客様はその光に感動し、拍手をします。私たちは日々の生活の中で、真摯に、懸命に生きている人に接したとき、共感や感謝を得るのだと思います。

かつて高校生の私に、父が「瓦を磨いて鏡とする」という故事を話してくれたことがありました。この言葉は「結果の如何を問わず、ただひたすらに努力を続けることの大切さ」を説いています。しかし、反抗期の私は「瓦は磨いても鏡になるわけではない」と、素直に聞くことはできませんでした。しかし、舞台での経験を経て、父の言った言葉に素直に頷けるようになりました。

振り返れば失敗もありました。マイクを床に落とし、その音をお子さんが雷だと勘違いして大泣きし、幕が上がらなかつたこと。高校での講演中、けんかから乱闘となり、幕を下ろしたことも。これまでの人生での失敗と経験が、自分自身を磨き育ててくれました。一步一步、悩みながら「今を生きる」ことが大切だと感じています。

さて、現在私は住職として修行しています。大本山永平寺を開かれた道元禅師さまは「坐禅修行そのものが、悟り」とおっしゃっています。舞台やテレビで活躍されている人を見るたびに、あの宝石のような輝きは、日々の鍛錬、修行にあるのだと感じます。私自身も心が弱くなっているときなどは、心を強くできるよう修行し磨き続けていかななくてはと思っています。